3つのグラント研究によせて*

——経済学および統計学の古典の研究方法についての示唆——

松　川　七　郎

ま え が き

ここで3つのグラント研究というのは筆者がたまたま読んだつぎの3つの論文のことである。

Glass, D. V. (London School of Economics): John Graunt and his *Natural and political observations.* (*Proceedings of the Royal Society*, Ser. B, Vol. 159, 1963, pp. 2–32.)

Sutherland, I. (Statistical Research Unit, Medical Research Council, London): John Graunt: A tercentenary tribute. (*Journal of the Royal Statistical Society*, Ser. A, Vol. 126, Pt. 4, 1963, pp. 537–56.)

Урланис, Б. Ц. (Институт Экономики АН СССР): Трехсотлетие демографии. (Ученые записки по статистике, Vol. 7, 1963, pp. 150–60.)

これらの3つの論文は，いずれもグラント(John Graunt, 1620–74)の唯一の公刊著作，すなわち『死亡表に関する自然的および政治的諸観察』(*Natural and Political Observations made upon the Bills of Mortality*, London, 1662——以下『諸観察』と略記)の公刊300年を記念して執筆され，1963年にいわば同時に公表されたものである。1962年の本誌で筆者もこれと同じテーマをとりあつかったが[1]，ここでのこの小稿の目的は，上掲の3つの論文の大筋を紹介し，『諸観察』についての筆者の理解と対比させながら，経済学や統計学の古典の研究方法についてこれらの論文から筆者がうけとった示唆を要約することにある[2]。

ところで，上掲の3つの論文は，すくなくとも形式的には構成上の共通点をもっている。というのは，節のたてかたや，それぞれの節に対する紙幅の割きかたは同じではないけれども，各論文の執筆者3氏(以下，上掲の順序で「G氏」，「S氏」，「Y氏」と略記)は，いずれも，1)グラントの生涯，2)グラントの『諸観察』の性質，3)『諸観察』についてのいわゆる「著作者論争」，という3つの問題についての論述をそれぞれの論文の主要部分にしているからである。そこで，筆者もまたこれらの3つの問題について，この順序にしたがって述べることにしよう[3]。

I 「グラントの生涯」について

従来，グラントの生涯については正確な事実はごくわずかしか知られておらず，漠然たる事実もあまり多く伝えられてはいなかった。この事情はグラントの終生の友ペティのばあいとは対蹠的だといってさしつかえない。しかもこの両者は，学問的にもとうてい切りはなしえないほど深くむすびつき，ともにきわめて高い学問的評価をうけてきただけに，この点はふしぎとさえ思われるのである。

こういう事情を念頭におきながら3氏の叙述を

＊　筆者は1966年度文部省科学研究費を交付されたが，この小稿はそれによる研究成果の1部である。

1)　「J. グラント『諸観察』の公刊300年——その現代的意義に関する1試論——」(『経済研究』Vol. 13, No. 3, 1962年7月)

2)　グラントの『諸観察』の公刊300年を記念する研究は上掲の3つにとどまるものではなかろう。筆者が直接読みえたものとしては，上掲の3論文のほかに，Renn, D. F.: John Graunt, citizen of London, (*Journal of the Institute of Actuaries*, Vol. 88, 1962, pp. 367–69)という小論がある。また，ハンガリーでは，Danyi, D.: John Graunt, (*Demographia*, Vol. 6, No. 1, 1963, pp. 58–64)が公表されている，という。

3)　このわずかな紙幅に3氏の論述の詳細を紹介することはとうてい不可能である。したがって，ここでは3氏のそれぞれの論旨に極力そいながら，それぞれの論述に特徴的と考えられる諸点を紹介することにしたい。

読みくらべてみてまず気づかれることは，S氏とY氏の研究が在来的な「グラント伝」をほとんどでていない，という点である。これに反し，G氏の研究にはひじょうな努力のあとが見られる。すなわち，G氏は従来グラントの生涯を明らかにするための基本的資料といわれてきたものはもちろん，ロンドン市の古記録，グラントが属していた同業組合(Draper's Company)の古記録，ペティの子孫ランズダウン侯のもとに保存されている未公刊文書その他について，多数の人々の協力をえていくつかの新事実を発掘しているからである。それにもかかわらず，G氏が新たに発見した諸事実は，たとえばグラントの住居についての諸事情とか，グラントの子どもたちについての消息とかという，文字どおりの個々的なディーテイルズであって，それ自体が貴重なものであることはもとよりであるにしても，グラントにおける学問の生成発展や，『諸観察』そのものの成立やについて重大な関連をもつものとはいえない。と同時に，これは3氏の論文に共通する点であるが，グラントの生涯における個々的な諸事実を，その時代の社会ならびにグラントその人の学問的成長，ひいては『諸観察』そのものの成立との関連において考察しようという志向がどちらかといえば稀薄であるように読みとられる。いいかえれば，生涯は生涯，著作は著作，というふうに考えられている，といっても過言ではなかろう[4]。

経済学や統計学の古典研究においてわれわれが特定の著者の生涯に関心をもつのは，著者その人をその時代の社会に位置づけ，両者の関連を明らかにするためである。というのは，当該著者は，その時代の歴史的制約をうけざるをえないし，またその反面，当該著作は著者をぬきにして(いわゆる「歴史的背景」のみによって)生みだされるものではもちろんないからである。いいかえれば，著者における学問の生成発展や著作の成立やは，当該著者がその時代の社会における問題を問題とし，いわばかれがこの社会と切りむすんだそのきわにおこなわれ，生みだされるものであるからである[5]。このことは現実社会を直接の研究対象とする経済学や統計学のばあいには，しかも総じて近代諸科学のことはじめの時代としての17～18紀世については，とくに強調されるべきであろう。

この観点からグラントの生涯を見るばあい，明らかにしたいことはひじょうに多いが，ぜひとも明確にしたい点がすくなくとも4つある，と筆者は考える。すなわち，第1は，市民革命の内乱時代にかれが1人のピュリタンとして議会軍に参加したことは一般にみとめられているが，その参加のいっそう具体的な内容である[6]。ピュリタニズムと当時の新科学の興隆との意味深い関連を考えるばあい，この点が重要であることはいうまでもなかろう。第2は，おそらくはこれと同じ時代にはじまったかれとペティとの交友関係の正確な諸

4) もっとも，Y氏のばあいには上記の関連(というよりもむしろ『諸観察』の成立の社会的背景といわれるべきもの)がある程度述べられているが，それは「グラントの生涯」という節ではなくて「グラントの著作」という節においてである。

5) 最近のベイコン研究によって，ベイコンの『大革新』や『ニュー・アトランティス』において展開された根本的な思想は，きわめて素朴な形においてではあっても，かれがケムブリッジ大学に入学するかしないかの少年時代にかれのなかに芽ばえていたこと，そしてこのことは，イリザベス女王の治下の大政治家で，土地改良に精だす新興の大地主でもあったかれの父と，カルヴィニズムから強烈な影響をうけていた博学な母からの，つまりかれの家庭的影響から生じたものだということが明らかにされた。*Cf.* B. Farrington: *Francis Bacon, philosopher of industrial science*, London, 1951, Chapt. II. このことは，上述の観点のもとに，少年ベイコンをその時代のイングランド社会のなかに置いて考察した結果として明らかにされた重要な関連を示す1つの事例というべきであろう。

6) グラントが当時のいわゆる新型軍(New Model)の少佐でまもなく少将にまで昇進したケルシー(T. Kelsey, *d.* 1680?)の義兄であったことは『国民人名辞典』にも明記されている。この関連は，こまかすぎるようなことではあるが，市民革命時代におけるかれの活動を考えたり，ペティとの交友関係を考えたりするばあい(ケルシーはクロムウェルによるオックスフォード大学の改組にさいしてのその責任者の1人であった)，けっして軽視できない点であって，C. Hill もそれを指摘している。*Cf. Intellectual origins of the English Revolution*, Oxford, 1965, p. 272, n. 7. なお，この点についての私見は拙著『ウィリアム・ペティ』(上巻)149ページを参照されたい。G氏，S氏，Y氏は，いづれもこの点にふれていない。

事情である。この点は，両者が終生の友であったという個人的な諸関係というよりも，むしろ両者の学問的協力関係というはるかに重要な問題に関連している。そして，社会問題の数量的観察についてのグラントの関心をめざませたのがペティだということは，多くの研究者が一致しているところであって，G氏もまたこの点を指摘しているが，当時のグラントがピュリタンであったこととペティが熱烈なベイコニアンであったこととを考えあわせると[7]，この交友関係の始期や具体的内容はますます重要だと考えられる。第3は，かれが死亡表の研究に関心をもつようになったいっそう具体的な動機およびそれについての研究の始期である。この点について，かれ自身『諸観察』の序文の冒頭で簡単に語っているが，いつごろから研究しはじめたかは語っていない。これらの点がもっとたちいって明確にされれば，『諸観察』の成立や内容のよりよき理解に役だつであろうことは明らかである。第4は，『諸観察』の公刊後，おそらくは1660年代の後半以降(つまり王政復古時代)におこったグラントのローマ旧教への改宗の動機とその時期である。この事実は，市民革命時代にかれがピュリタンであっただけに，また当時は政治・宗教・思想・科学の4者がとりわけ密接に関連しあっていただけに，当然重視されるべき点であろう。

以上の4点について，G氏はいずれも不明としたり，起りうべき可能性を述べたりしている。いずれにせよ，たとえ文字どおりのディーテイルズではあっても，G氏の努力の結果としていくつかの新事実が明らかにされたということは，すでに一言したように貴重な収穫である。というのは，こういう努力がひきつづき払われるならば，より重要な関連を明らかにする手がかりがえられるであろうからである。これを要するに，3氏の論文のこの部分から，経済学や統計学の古典の研究方法について筆者がうけとった示唆を要約すれば，上述の観点からする特定の著者の生涯についての研究のいっそうの重要性ということになるであろう。G氏もS氏も，申しあわせたように「私は歴史家ではない」といっている。筆者もまたこれと同じことをいわなければならないが，ここでの問題は，当該研究者が「歴史家」であるとかないとかにあるのではなくて，事実上，歴史的な問題をとりあつかわざるをえないし，また現にとりあつかっている，ということにある。

II 「グラントの『諸観察』の性質」について

上掲の論文のこの部分を，G氏は「グラントの著作の性質」，Y氏は「グラントの著作」という各1節で論じているが，S氏はこれを9つの節に分けている。すなわち，各節のタイトルをそのまま訳出すると，1)『諸観察』，2)グラントの科学的アプローチ，3)死亡表，4)グラントの立論と方法，5)人口動態，6)人口推計，7)最初の生命表，8)さらにすすんだ統計学的アプローチ，9)グラントの統計学的認識の限界，がそれである。これらの各節に割かれているスペースは平均約1ページ半にすぎないが，それを全体として内容的に見れば，けっきょくG氏やY氏の上記のタイトルに総括しうる，といってさしつかえなかろう。逆にいえば，G氏もY氏も，こまかな節に分けてはいないが，内容的には，(力点のおきかたは必ずしも同一ではないにせよ)S氏が述べている諸点について論じているのであって，ただちがうのは，S氏の上記の8)に相当する考察が他の2氏のばあいにはほとんどなされていないという点である。

ところで，この部分についての3氏の叙述をつうじて気づかれる最大の特徴は，3氏の『諸観察』についての理解がその大筋においておどろくほど一致している，という事実であろう[8]。このことは，3氏が各論文の導入部で，従来の一般的な評価としてではなく，むしろ現在自分自身の評価と

7) この点に関連して，グラントが『諸観察』の献辞のなかでベイコンの『生死論』(Discourses of life and death)に自著をなぞらえていることが想起される。そしてこの『生死論』がベイコンの The history of life and death...Being the third part of the Instauratio Magna (*Works*, rep. ed. 1963, Vol. 5, pp. 213-335)に関連していることはまちがいなかろう。

8) こまかい点についての相違はもちろんある。その比較的重要と考えられる点については，それぞれのばあいに指摘することにしよう。

して，グラントを統計学またはデモグラフィーの創始者として位置づけていることに照応している。したがって，『諸観察』はもっぱらこの観点から光をあてられ，理解されることになり，その結果，この古典のメリットは大別して2つの点に集約されることになるのである。

すなわち，その第1点は，この著作に示されているグラントのアプローチや研究方法が「統計学的に」きわめて厳密で科学的だということである。グラントが手にしえたデータは，主としてロンドン市にかぎられ，毎週の男女別出生(洗礼)数，死亡(埋葬)数および81の死因に分類された死亡総数，ならびにその1ヵ年の総計であった。これらのわずかな，しかもひじょうに不完全なデータを処理しながら，かれはさまざまの観察をひきだしたのであって，その結果，かれの諸観察の「統計学的な」部分のほとんどすべては推計にもとづくものになった。そしてこの統計的推計をおこなうばあい，かれは，資料の収集・その吟味・推計方法・推計結果の検証方法などについて，現代の経済学者や統計学者をも恥かしがらせるほどの良心と科学的周到さを示している，というのである。この点についてはだれしも異論をさしはさむ余地はなかろう[9]。

つぎに，その第2点は，『諸観察』の最大の成果が社会(人口)現象における数量的(統計的)規則性の発見にある，ということである。そしてこの規則性のなかには，いわゆるグラントの「生命表」と称せられる死亡生残表もふくまれるのであるが[10]，その他の規則性としては，1)出生における性比の恒常性，2)死亡総数に対する慢性的疾患による死亡率の恒常性，3)都市における高死亡率(農村にくらべての)，4)幼児における高死亡率(成人にくらべての)，その他等々である。商業算術，グラント自身のことばでいえば「私の商店算術という数学(Mathematiques of my Shop-Arithmetique)」を主要な方法の1つとして，上述のようなデータからこのような規則性を導出したという事実は真に驚嘆すべき功績といわなければならない[11]。

ところで，以上が3氏のこの部分についての理解の要約であるが，このばあい3氏は『諸観察』の内容について重要な他の2つの点を全然無視または軽視している。すなわち，その1つはグラントのこの著作が「自然的および政治的」な『諸観察』であること，もう1つは『諸観察』には原著者による「結論」がつけられていること，がそれである。そして前者のばあい，グラントによると，「自然的」とは「空気・地方・季節・多産性・健康・疾患・長寿・人間の性比および年齢比」に関連するということであり，「政治的」とは「産業・統治」に関連するということである[12]。そしてグ

9)　これらの点については3氏ともそれぞれ例をあげて興味ふかく述べているが，ここではそれを割愛する。そして筆者としてはむしろ『諸観察』の原典について直接それらの点を読まれることをおすすめしたい。

10)　このいわゆる「生命表」がどのようにしてつくられたかは従来疑問とされ，後述の「著作者論争」においても主要論点の1つであった。3氏ともこれを論じているが，決定的な答えはだされていない。問題は，当のグラントが，「われわれは6歳における生存者64人と，76歳以上まで生きのびる1人とのあいだに，six mean proportional numbers を求めた」といい(『諸観察』第11章)，この 'six mean proportional numbers' がいかなる数か，またそれをどのようにして「求めた(sought)」のかを全然明らかにしていないところにある。したがって，あらゆる研究者はこれを憶測するほかはないのである。この問題に筆者はここでたちいらないが，G氏が執筆したつぎの論文をあげておきたい。D. V. Glass: Graunt's life table. (*Journal of the Institute of Actuaries*, Vol. 76, 1950, pp. 60–64.) この論文には，この問題に関連するいくつかの文献がかかげられている。

11)　なおS氏は，上記の8)に相当する節および結論に相当する第13節において，1)その後現代にいたる記述統計学は，数字の精緻さ・用語の厳密さ・計量の正確さ・人口センサス・標準偏差・相関係数，などについてグラントがうちだした諸概念に，リファインされた数学的形式をあたえたにすぎず，確率論といえどもグラントが漠然とではあったが理解していたこと，2)グラントは特定の教区の記録を標本としたのであるから，現代の実験計画論もかれをおどろかせはしないであろうこと，の2点を指摘し，それをみずからの結論の1部にしている。このような指摘はG氏やY氏のばあいにはまったくない。

12)　これはこの著作の献辞に記されていることであるが，タイトルページにはこれらのほかに「宗教」があげられており，本文中にも随所に宗教に関する論述がある。

ラントは，上述の数量的規則性を論じるばあい(実は'numerical regularities'ということばさえ用いていないのであるが)，人間の健康と空気の汚染・空気の汚染と石炭消費の急増加(産業の興隆)・人口の都市集中・洗礼出生数の増減と宗教上の紛争・職業と寿命・「特殊の死因」としての餓死者・「富の父」としての労働の保全等々，市民革命期のイングランド社会が提起していた諸問題に論及しているのである。このように見てくると，グラントが「自然的および政治的」と規定したすべての観察は，社会経済的諸観察といいかえてさしつかえなく，純粋に「自然的」といいうるのは出生における性比だけ[13]，ということになる。しかもグラントは，この社会経済的諸観察を，多くのばあい，上述の規則性を意味づけたり制約したりする諸要因として(数量的規則性がいわば歴史性をもつものとして)論じているのである。この点はとうてい無視または軽視できない特徴である[14]。社会経済現象を数量化するということ自体，この現象を抽象化することなのであるから，この特徴の無視または軽視は，統計学の現実からの遊離につらなる傾向といってよい。

つぎに，『諸観察』の「結論」であるが，ここでグラントが述べているのは，上述の意味における社会経済的諸観察と完全に符節をあわせた問題であり，同時に新しい問題提起でもある。というのは，ここでグラントは，自分たちが人民数その他について調査し，「自然的および政治的諸観察」をおこなう目的を自問し，その答えとして「人民を平和と豊富とにおいて保持すべき真の政治学(true politiques)」の建設を提唱しているからである。そして，ここでグラントのいう「政治学」は同時に市民革命を経過しつつ建設の途上にあった近代的国家の政策でもあったのであるが，こういう意味における「政治学」をその発展としてのペティの「政治算術」と関連させながら後者の見地からふりかえって見れば，グラントのいう「政治学」は未分化の形における近代社会諸科学の貴重な萌芽といってさしつかえなく，極言すればペティからスミスにいたる経済学説のいわば出発点の1つともいえるのである[15]。G氏もS氏もこの「結論」をまったく無視しているが，それはどのような理由によるものかまったく理解できない。というのは，かりにグラントの提唱する「政治学」が統計学またはデモグラフィーと無関係だと考えたにしても，「商業における普遍的な尺度の必要を知る」(献辞)ほどの商人グラントは，この「結論」のなかで，後代において経済学・統計学またはデモグラフィーとして分化したところの，「土地と人手」の価値と数量についてのきわめて包括的な調査の必要性を力説し，それをかれのいう「政治学」の「基礎または根本的要素」だといいきっているからである[16]。

経済学や統計学の古典研究においてわれわれが特定の著作を理解するばあい，当該研究者がどのような立場をとるにせよ，その著作を，当時の社会との関連を考慮しつつ全体として理解することが必要だということはいうまでもなかろう。そしてこのことは，特定の著作の特定の部分に着眼し，そこに力点をおいて理解しようとするばあいにも妥当するであろう。当面のばあいのように，グラントの『諸観察』そのものの公刊300年が記念されるばあいには，この点はいっそう強調されてよいであろう。以上のことは，3氏の『諸観察』についての理解をつうじてあらためて筆者が考えさせられ，示唆をうけた点である。そしてこのことは，一方では特定の著者の生涯のとりあつかいか

13)　出生における性比すら，現実社会の現象としてはけっして純粋に「自然的」とはいえないであろう。

14)　もっとも，S氏とY氏は，この点に全然ふれていないわけではない。しかし，前者のばあいにはいわば推計技術上の難点として考えられているにすぎず，後者のばあいには『諸観察』が「社会学的な性質さえもっていたこと」や，「統計資料を社会経済的に分析しようとする試み」としてきわめて軽くとりあつかわれているにすぎない。

15)　以上の私見については，前掲の拙稿と拙著『ウィリアム・ペティ』(下巻)第4章を参照されたい。

16)　Y氏はこの「結論」にふれているが，そのばあい同氏は，それを『諸観察』の全体をしめくくる「結論」としてとりあつかわず，グラントは「デモグラフィーの意義」を，「商工業を指導し」「国家を統治する」ために必要だという見地から「広義に理解していた」と述べているにすぎない。

たと密接にむすびつくと同時に，他方ではその著者の著作の評価の問題とも密接にむすびつき，さらにこれが研究者の視点や立場と切りはなしえない問題であることはいうまでもなかろう。そこで，つぎに『諸観察』のいわゆる「著作者論争」をつうじてこの問題を考えなおしてみることにしよう。

III　いわゆる「著作者論争」について

『諸観察』の著作者についての論争は，「論争」とまではいえない論議までをもふくめれば，300年にちかい歴史をもっている。これを簡単に要約することはきわめてむずかしいが，この著作の「真の著者はグラントかペティか」という素朴な形で17世紀末に提起された論争が，19世紀末になって「両者の共著だ」という形でおちつくと同時に，両者のうちのどちらがこの著作の本質的な部分を執筆したのか」という問題が新たに提起され，さらに「この著作の本質的特徴はどこにあるのか」という形で論争または論議がくりかえされて現在におよんでいる，といっても大過なかろう[17]。そしてこの論争は社会科学の分化・細分化と符節をあわせて進展したのであるが，19世紀末から第2次世界大戦までの時期において大勢を占めていた見解は，『諸観察』の本質的な特徴は統計学的研究方法と統計的規則性の導出とにある，そしてこれらはグラントに帰せられるべきものであるから，ペティはなにほどかの協力をし，したがってこの著作は両者の共著ではあろうけれども，本質的な著者はグラントだ，というのであった[18]。

ところで，上記の3氏はいずれもこの問題をとりあつかっているが，これにもっとも力をそそいでいるのはG氏である。そしてこの問題についての3氏の見解の共通点は第2次世界大戦までの時期において大勢を占めていた上述の見解と一致しており，G氏のばあいにはそれをいっそう強化する論証が加えられ，この見解がそのままG氏の論文全体の結論にもなっているのである。

3氏のこのような見解がとりもなおさず『諸観察』に対する3氏の評価だということは疑いない。そしてこういう評価が『諸観察』そのものの内容的な理解に一致し，さらにこういう理解がグラントを統計学またはデモグラフィーの創始者として最初からきめてかかっている3氏自身の視点または立場に照応するということも，くりかえすまでもなかろう。この意味において3氏のグラント研究は(それぞれに若干の内容的な相違はあっても)，大局においていずれも首尾一貫している，といえよう。

ところが，第2次世界大戦後のグラント研究やペティ研究には，『諸観察』の生成や内容を著者の生涯やその時代と密接に関連させながら全体として理解しようとする研究や，グラントをペティと関連させ，当時の社会はもちろん，同時に両者に先行する諸思想や両者があたえた諸影響とも関連させようとする研究やがでてきている[19]。そして，これらの研究の大部分のものは，『諸観察』をより広い視野のもとで理解し，いわゆる「著作者論争」をとりあげるにしても，程度の差はあれ，『諸観察』を両者の実質的な協働という意味における共著としていると考えてさしつかえなかろう。

---

17)　この「著作者論争」についての私見は，拙稿「J. グラント『諸観察』の成立，その方法の発展および評価をめぐる歴史的展望——統計学の学問的性格に関する1反省——」(『経済研究』Vol. 7, No. 2, 1956年4月)および前掲拙稿を参照されたい。

18)　この見解に対する第2次世界大戦前の正反対の見解については，注17)にある1956年4月の拙稿を参照されたい。

19)　たまたま筆者が気づいたもののなかでも，つぎの諸研究は注目すべきであろう。E. Strauss: *Sir William Petty, portrait of a genius*, London, 1954; St. Konferowicz: *Liczby premówiły. Twórcy metod statystycznych, John Graunt i William Petty, na tle epoki*, Warszawa, 1957; I. Masson & A. J. Youngson: Sir William Petty, (*The Royal Society, its origins and founders*, ed. by Sir H. Hartley, London, 1960); W. Letwin: *The origins of scientific economics, English economic thought 1660–1776*, London, 1963; C. Wilson: *England's apprenticeship 1660–1763*, London, 1965. 上記の注6)にかかげたC. Hillの研究も，(「著作者論争」にはふれていないが)当然これに加えるべきであろう。そして，これらの諸研究が理論上の立場や歴史的観点においてそれぞれ異なっていることはいうまでもない。ついでながら，わが国のペティ研究には，グラントとの関連を不問に付す傾向が強い。これは，グラントは統計学，ペティは経済学，というふうに割りきって考える結果なのであろう。

経済学や統計学の古典研究において，われわれが特定の著作を理解し評価しようとするばあい，すくなくとも当該著作と，著者その人と，この著作を生みだした時代との関連においてこれをおこなうのが必要だということはすでに述べたとおりである。そしてグラントの『諸観察』が，つきつめていえば「商店算術という数学」を社会経済現象の研究に適用しつつ生みだされ，「真の政治学」の建設を志向する社会経済的諸観察を豊富な内容としていることもくりかえす必要のない事実である。もしそうなら，現代の細分化され数理化された分野の経済学，統計学またはデモグラフィーの観点から『諸観察』に光をあて，こういう観点からのみそれを理解しようとする接近方法は当然恣意的だというそしりをまぬかれないであろう。そしてもし前出の注 11) に述べられているS氏の見解が正当であるならば，社会経済現象を研究するばあい，数理的なコンシステンシーを主として追究する分野の経済学や統計学はおよそその意味にとぼしいものだということをグラント自身が教えている，といわなければならない。というのは，グラントやペティの時代は 'mathematics' が 'political' な(つまり 'socio-economic' な)科学になった時代だといってさしつかえないが，数理的なコンシステンシーに重点をおく現代の経済学や統計学のいくつかの分野は，グラント的な含蓄を失った 'applied mathematics' か，またはそれにちかいものになりさがってしまった，といわなければならないからである[20]。この意味で，300 年まえのグラントはなお現代に生きている。というよりも，むしろ現代においてこそ生かされてしかるべきである，といえよう。

ところで，経済学や統計学の古典を研究し理解し評価するばあい，われわれは，意識すると否とにかかわらず，実は一定の問題をもち，一定の観点なり立場なりからそうしているのである。というのは，現にわれわれはさまざまの問題をもつ現代に生きているからである。したがってこのばあい，個々の研究者の問題意識や，その観点なり立場なりがどの程度まで現実社会に客観性を主張しうるかが当然問題となるであろう。すでに述べたところから明らかであるように，上掲の 3 氏はみずからが現代の統計学またはデモグラフィーと考える立場からこれをおこなっている。ところが，統計学だけについて見ても，その科学としての規定や研究対象や方法やについて，現状はけっして統一されぬどころか，ますます多義的になっているのであって，このことはソ連邦における統計学論争や，経済学における数学利用の問題についての論議にあらわれたさまざまの見解だけについて見ても明白であろう。そして，経済学をはじめとする社会科学の諸分野における分化・細分化への傾向がますます強化される反面，それらの総合統一への要請もまた高まっていることは一般的事実だといってさしつかえない。そうとすれば，西ヨーロッパにおける近代社会諸科学(とりわけ経済学と統計学)の未分の萌芽の 1 つとしてグラントの『諸観察』を理解し，それとして評価するということは，より高い次元における社会諸科学の統一という現代的要請との関連において，よりいっそう客観性をもつ評価だといえよう。

経済学や統計学の古典研究の窮極の目的は，つまるところ当該古典のもつ現代的意義の追究であり，その意味においての現代経済学や統計学に対する批判であり，ひいては現代社会そのものの批判でもある。そしてそれが現代に対する批判であるかぎり，同時にそれは将来への展望を内包しているといえよう。こういう観点から上掲の 3 氏の所説を全体として考えなおすと，大局的には，3 氏はいずれも分化・細分化・数理化された統計学の現状を肯定し，第 2 次世界大戦前のそれとほぼ同一の評価をくりかえしている，ということになろう。そしてもしこれが事実だとすれば，3 氏が 300 年もまえのグラントの『諸観察』をわざわざ記念するなどという必要はいったいどこからでてくるというのであろうか。以上が上掲の 3 つのグラント研究をつうじて筆者がうけとった示唆の全体的な要約なのである。

---

20) 現に R. A. フィッシャーは統計学を「応用数学の 1 部門」だと定義している。もっとも，筆者はここで自然科学の分野におけるフィッシャー流の統計学の意義をとやかくいうつもりはない。